

健康文化

健康文化を具現する「あいち健康の森」

小林 英治

これからの時代、人生80年をどう生き抜くか。

私たちの最大のテーマである。健康は、生きることの目的そのものではないが、高い生命の質を求める必須の条件である。健康を文化にまで昇華する。そんな思いで「あいち健康の森」づくりを進めている。

I. 「あいち健康の森」の考え方と役割

私たちは、科学技術と経済の急速な発展によって、祖先が苦しみながら求め続けて来たもの、物質的な豊かさと80年もの長寿を、いま手にしている。人間の欲求は「物から心へ上さらに高い次元へと向かい、精神的な側面を含めた「本当の豊かさ土より高い健康度と生きがい」を備えた‘Quality of Life’（生命の質・生活の質）を求める時代になった。これは、若い世代から高齢の世代まで通じた大きな課題である。健康な状態を楽しむ。心とからだで健康を感じることが日常の生活スタイルとして定着したとき、人びとに幸せと生きがいをもたらす。

「本当の長寿社会」「明るい長寿社会」を築くために、最も基礎となる「いのち・健康」をテーマに据えて、人生80年時代をどう生きるか、人生80年型社会をどうつくるか、一人ひとりが考え、努力するとともに、社会としても研究・実践を進めていく必要がある。

健康の問題は、若いころからの生活習慣などが大きく関係する極めて個人や仕組みにも大きくかかわる問題である。

高齢者がふえて、寝たきり老人やぼけ老人の増加が心配されている中で、老化による心身の機能の低下を防ぐこと、機能の低下を補ってできるだけ自立した生活を確保すること、老人の医療や看護・リハビリテーションの水準を高めることなど、専門的な研究・開発をすすめると同時に、一人ひとりが「いのち・健康」について学び日常の生活をふりかえることや、保健・医療、福祉などの関係者が日常の仕事をふりかえって話し合う、ということが重要になる。

治療中心の医療から予防・健康づくりを含む医療へ、医師まかせからセルフ・

ケアをもとにした健康管理へ、入院・入所中心から在宅・地域ケア中心に、といった課題が提起される中で、こうした問題を考える場、推進する総合的な拠点施設が求められている。

「あいち健康の森」は、高齢化社会に対応する保健・医療・福祉等の「総合的な拠点」として、a. 老化、老年病の研究を進める全国的なセンター、b. 高齢者のための地域ケアシステムづくりを支援するセンター、c. あらゆる世代の人々が心身をリフレッシュし、健康と生きがいを高めるセンターの役割を担おうという野心的な構想である。

2. 全体のイメージ

1. 人生 80 年をより健康に生きるための研究と学習の森

- (1) 老人医療と長寿科学の全国的な研究拠点。
- (2) 保健・医療・福祉関係者の連携による地域ケア推進のための研究・協議・研修・情報提供などの拠点。
- (3) 健康と長寿社会の問題を中心とする生涯学習の拠点。

ゾーン	主な施設
シルバーサイエンス・ゾーン (研究ゾーン)	国立長寿科学研究センター 特別養護老人ホーム
センター・ゾーン (センター及び体験学習ゾーン)	健康開発センター 健康科学教育館 滞在型学習施設 中央管理センター 都市公園
アクティブヘルス・ゾーン (運動公園ゾーン)	都市公園
クリエイティブライフ・ゾーン (文化・生きがいゾーン)	スポーツ・レジャー・文化などの 大規模施設(民間)
コミュニティケア・ゾーン (地域福祉ゾーン)	コミュニティケア・センター モデル的な老人保護施設

表1 計画施設

- a. 自然の生命や人体の健康を守る仕組みを知り、日常生活をふりかえりながら、心身の健康を増進する方法を学ぶ。
 - b. 健康を守る人間の努力、社会制度の歴史などを学び、保健医療施設・福祉施設の利用方法や奉仕活動などについて考える。
- (4) 自立自助と同世代間・世代相互間の社会連携の考え方に立った地域活動の推進拠点。
2. 心身の健康を高めるリフレッシュと交流の森
- (1) 樹木や小鳥などの生物の四季の営みを感じられる中で、日常生活を離れて人間的な交流を深め、心身をリフレッシュする。
3. 多くの人に利用される施設
- (1) 一般の人々にはもちろんのこと、地域ケアにかかわる医師等の専門家や研究者たちにも喜んで来てもらえる快適な場所にする。
- (2) 実年・老年世代だけでなく、成・壮年期の人々や子供・若者たちにも楽しめるものにする。
- (3) 地域の職場のさまざまな団体やグループを重視し、その日常活動との横合を図る。
- (4) 民間の企業や団体にも参画を求めて活性化、効率化を図る。

Ⅲ. 立地場所

200万都市名古屋の南東に隣接し、その中心から約20hの距離に、大府市（7万人）、東浦町（4万人）がある。この大府市と東浦町が境を接する部分に、現在、国立療養所中部病院（病床数1000）、県立大府運動公園（25ha）、特別養護老人ホーム大府寮（定員150人、うち痴呆50人）がある。県内の各地からも全国の各地からも交通の便がよく、近くまで市街化が進んでいるが、周辺にはぶどう畑や水田が広がり、雑木林も点在するなだらかな丘陵地帯で、自然的にも社会的にも理想的な条件を備えているため、これを中心に、周辺をあわせた約100haの地域に「あいち健康の森」の建設を予定している。

Ⅳ. 計画施設

「健康の森」では、既存の関連施設との役割分担、長寿科学研究センターとの連携などの点から、表1のような施設を計画し、五つのゾーンに分けて、整備するものとしている。このうち、特に健康開発センター、健康科学教育館、

滞在型学習施設、中央管理センターが重点施設とされ、これらを早期に整備することとしている。

なお、「健康の森」は、国、県・市町村・民間による共同の事業として構想されており、各施設の建設・運営には民間活力の導入のほか、国の関連プロジェクトやモデル事業の導入を図っていくこととしている。

また、基盤となる都市公園や「健康開発センター」などの重点施設の整備については、公共的な性格が強いので、県をはじめとする公共セクターが中心となって早期に整備を進めていくこととし、民間にも、特にクリエイティブライフ・ゾーン（文化・生きがいゾーン）を中心とした、創造性の高いサービスを提供する施設（「心とからだの健康」というテーマに合ったスポーツ、レジャー、レクリエーション、カルチャーなどの関連施設）の設置を期待している。

ここでは重点施設について、考え方を紹介したい。

(図1)

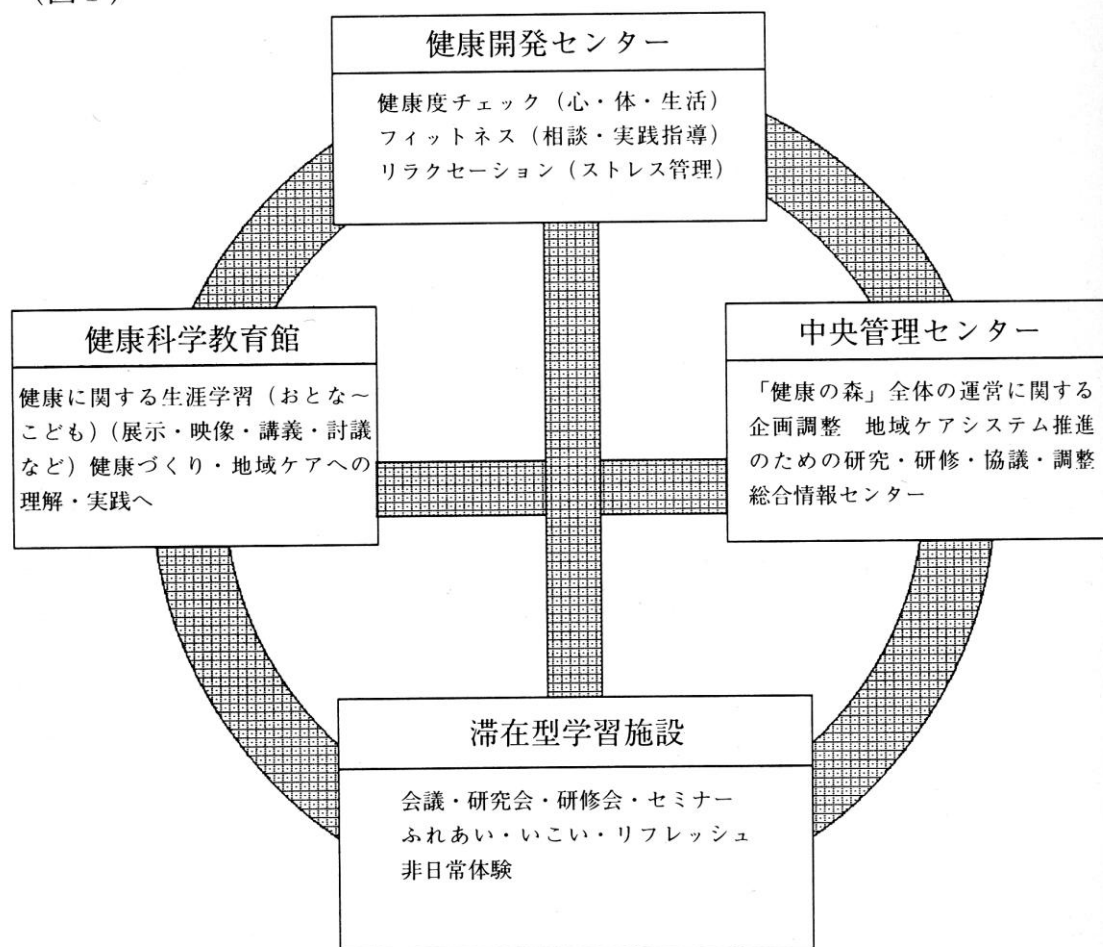


図1 健康の森の重点施設

図1 健康の森の重点施設

1. 健康開発センター

成人病については早期発見・早期治療が重要だが、職場・地域において各種の検診制度が整えられ、総合検診（人間ドック）についても多くの医療機関で広く行なわれている。

今後は、「病気の有無を検査してもらう」という受動的・一時的な対応にとどまらず、「ふだんから自分で健康度をチェックし、主体的に健康づくり・健康管理をする」ことへ進めることが課題となろう。心の健康度や生活習慣の健康度を日常生活の中で自らチェックする指導や、一人ひとりの個性や生活条件に合わせた健康づくりの指導の手法などの研究開発に期待が寄せられる。

愛知県では、昭和46年以来、愛知県総合保健センターが成人病総合検診と健康づくり指導の実践的な研究で先導的な役割を果たしており、61年には財団法人愛知県健康づくり振興事業団も設立している。健康開発については、疫学的、社会医学的な研究を中心に、栄養、ストレス、ライフスタイル、運動生理などの、総合的なアプローチが必要と考えられるので、これまでの成果をもとに、国立長寿科学センターや大学等と共同して、新しい課題に取り組むことが期待される。

2. 健康科学教育館

生命の営みの不思議さや、人体が健康を守る仕組みの精妙さを知ることは感動的である。健康が自然の中で、そして人々の努力の中で守られていることを理解するところから、感謝や愛着が生じ、大切にしようという行動が起こる。「健康問題」を、生物・医学的な側面からだけでなく、社会的側面も含めて取り上げることによって、人年80年時代の健康づくりや地域ケアシステムへの理解と実践へのきっかけが得られるであろう。

健康に関する生涯学習施設として、大人の問題に重点をおくが、展示や映像は、子供にも感動的なわかりやすいものとし、健康問題の学習と教育に熱意のある高齢者、婦人、学生などのボランティアが問題を提起し、話し合い、語りかけることによって、人と人とのつながりの中で、さらに理解を深め、実践につながるものとしたい。

3. 中央管理センター

「森」全体の運営について、運営協議会・各種委員会を開催して、企画・調整を行うほか、保健・医療・福祉の総合的な地域ケアシステムづくりについて、研究、指導、調整を行うセンター機能を担う。また、地域ケアシステムに関係する人や一投県民からの問い合わせに応じて、必要な情報を知らせ援助するセンターの機能をあわせたものとする。

4. 滞在型学習施設

視聴覚教育設備の整った会議室や教室を備え、保健・医療・福祉をはじめ労働、教育など、長寿社会や長寿科学に関する研究会、研修会が常時開催されるほか、地域や職場のグループの会合や交流・研修の合宿などにも利用されるものにする。

寝食を共にし、話し合う中から、地域ケアの充実や、地域・職場の健康づくりやボランティアの核となる人材が育っていくであろう。

快適な非日常的環境の中で、職場や家庭での日常生活をふりかえり、人々との交流の中で、趣味、地域活動などを含む、多面的な学習活動が行われる快適な滞在施設としたい。

5. 文化・生きがい関連施設

遊びゆとりの中で、たくさんの人とスポーツ、文化、芸術などの活動を共にしながら、心身をリフレッシュして、より活動的な、より高い健康度への意欲を新たにできる場にしたい。

国立長寿科学研究センター、健康開発センターなどと共通の課題認識に立つて、よりよく生きる意欲の向上に寄与する、大型の楽しい施設群を民間主導で設置する。

V. 構想の具体化に向けて

「あいち健康の森」は、昭和62年6月に基本構想が、平成元年3月に基本計画がそれぞれ有識者による会議でまとめられており、明るく、活力に満ちた長寿社会の実現に寄与するため、国・県・民間も含めた共同事業として、国立長寿科学研究センターを学術の中核として、より高度で深みのある施設群の建設に向けて動きだしている。

1. 今後の進め方

厚生省においては、国立長寿科学研究センターの具体化に向けて、平成2年度に大臣官房に創設準備室を設置し、整備計画の策定を進めることとしている。

「あいち健康の森」の重点施設、健康開発センター等については、平成2年度に実施計画を策定することとしており、施設の規模、内容を詰める。

一方、「あいち健康の森」全体を建設省の新規施策「地域活性化公園（テーマパーク）総合計画」の対象とする予定で、健康の森の景観、基盤をより充実させる目的で、テーマパークの中核となる都市公園の基本計画も策定することとしている。

また、国・県・地元大府市・東浦町・民間などで共同事業の推進母体となる「健康の森協会」を平成2年5月ごろまでに設置し、一体的な推進を図っていく。これとあわせて、愛知県として、「あいち健康の森」整備事業に要する財源の確保を図るため「あいち健康の森整備事業推進基金」を平成2年度に設置する（平成2年度70億円余）。

2. スケジュール

全体事業費概算で、1500億円を優に越す規模が想定される大きなプロジェクトであるので、整備期間を2期に分け、第1期を平成8年度目標に、第2期を平成9年度から平成12年度までとしている。

第1期は、1990年代半ばに発足をめざす国立長寿科学研究センターを国が、健康開発センターなどの重点施設、これらを取りまくベースとしての都市公園の整備やアクセス道路の重点整備を県等が行う。第2期は、クリエイティブライフ・ゾーン（文化・生きがいゾーン）やコミュニティケア・ゾーン（地域・福祉ゾーン）の整備を民間等の主導で整備することとしている。いずれにしても、「自然とのふれあい」「人間性豊かな文化的交流」「リラクゼーション」など、健康文化を具現する新しい試みとしての森づくりがすすむ。

（愛知県衛生部健康の森推進室室長）